

久保 弘毅

Vol.103

VOICE OF HANDBALL

PROFILE 1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でプレーオフ男子決勝を完結。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球の取材を続けている。

送球の昂 独逸編

～榎田亮介（北陸電力）と 梶原晃（ドイツ2部・TU エムステッテン）とのドイツ談義～

ともに日本では異色とも言えるキャリアを積んできた2人による対談。日本とドイツの違いをハンドボールだけではなく、生活や文化の面からも語ってくれた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ ドイツを体感した2人

かつてドイツ3部のピルナに所属していた榎田亮介と、ドイツ2部のTVエムステッテン（昨シーズン1部）でプレーしている梶原晃。2人が初めて会ったのは今年の5月と、日は浅い。しかしハンドボールとドイツという共通の話題で意気投合し、互いを尊敬し合う仲になった。

自分を売り込み、ドイツの文化に適應したという点で、2人の境遇はよく似ている。

今回の対談では、時に榎田が聞き役に回りながら、梶原のドイツでの暮らしやプレーぶりなどを引き出してくれた。

ドイツは契約社会

——梶原さんは「社会的ではない」と公言されていますが。

梶原：人見知りなんですよ。

榎田：俺も(笑)。

梶原：榎田さんは違つて(しみ)笑)。

榎田：いや、ホンマに(笑)。

梶原：今も多少無理しているところはあるんですけどね。僕はなにかを頼つてドイツに行ったわけではないんで。チームも決まっていなかったし、言葉もできない状態でドイツに行ったんで、人見知りじゃべれないと言つてたらなにも起こらない。だからハンドボールをするためにドイツに行きましかたけど、人間性を高める意味でも、ドイツに行つてよかつたと思つています。

——ドイツの文化に慣れるまで大変だったかと思ひます。

梶原：大人になるまで日本で育つてきたから、日本人としてのパーソナリティがはつきりして、

最初は日本との違いがつかつたです。でも、だからこそ変に飲み込まれずに、日本人としてのよさも持ちつつ、ドイツのいい面、悪い面も受け入れていかないとけないんだなと感じました。若いうちに行つた方が柔軟に対応できる

ところもあると思いますけど、大人になつて行つたからこそ、冷静にいい面も悪い面も見られるというのがありますね。

——榎田さんはドイツの文化になじんだ印象がありましたけど。

榎田：向こうに行つて「なんや、これ！」というところはありましたよ。最初にアウエとの契約でもめた時も「噂には聞いていたけど、まさか自分に降りかかつてくる」とは「と思ひました。それ以来「これよりひどいことはないだろう」と思つていたら、今度はヒザのケガをして。この2つが大きすぎたから、ほかのことは蚊に刺された程度です(笑)。

梶原：一度そつというデカいことを経験するたびに「一回やつたから、も

う大丈夫だろう」という免疫ができます。

——梶原さんも契約で苦労されたのですか？

梶原：大学卒業後にテストを受けに行つて、とあるチームで練習させてもらいました。その時は3カ月しか滞在できなかったのですが、その後、日本に戻つてチームとコンタクトを取つていたら「いいよ！みたいな感じだったんですけど、そのあと話が止まつて…。具体的な話がないまま、シーズン始まる前後に「やっぱダメ」って返事がきました。

——それもひどい話ですね。

梶原：期待して待つていた部分はあったんですけど、もう自分で行くこと決めたからには、日本にいても仕方ないなと思つて、とりあえずドイツに行つて、自分でチームを探することにしました。これは自分にとつて最初の大きな出来事でした。でもヒザの問題だったり、言葉の壁だったり、毎年なにかしら問題はあります。

榎田：僕もヒザの問題はありましたがね。2年目にヒルナに残る時も結構苦労しました。

梶原：ヒザの問題は大きいですね。

榎田：僕の場合はチームとの契約条件は詰まつていたけど、「ヒザが取れたら」といつことで、そこから3カ月ほど止まつていた。だから4部での優勝を決めてもすべに日本に帰れませんでした。前の年に痛い目にあつていて「18」ソツくまでは、絶対に帰つたらアカン」という気持ちで、向こうに残つていました。

——日本とは感覚が違いますか？

榎田：向こうはもうOKと思つているかもしれないけど、こっちはわからない。1年ドイツにいたくらいでは、ドイツ語の契約書は全部理解できるわけではないし。入る時に苦労すると、次は向こうがあきれくらゐに、こっちは慎重になります。

梶原：ありきたりですけど、最後にサインするまでわからない。口では期待を持たせるようなことを

言ったんですけどね。向こうにはそういう気はないんでしょうけど。

榎田：それが悪いという感覚はないと思います。こっちが「言っただじやないか」と主張しても「契約を交わしてないから」とて話になる。

榎原：言った、言わないではなく、契約社会なんです。

ドイツ人の暮らし

——榎原さんは練習生でエムスデッテンのセカンドチームに入りましたが、その当時、どのようにして生計を立てていましたか？

榎原：「ビザのこともあるので、向こうでは学生になりました。ドイツ

で安く済ませようとするなら、学生だと学費はタダだし、住むのもドイツ人2人と自分とで1つのマンションをシェアして、家賃はインターネットなども込みで、僕は1月で100ユーロ（1ユーロ＝約136円）も払っていませんでしたね。

あとは食費と保険なども含めて、月400ユーロくらいで済ませることができそうです。

——ドイツに宿泊すると、結構なお値段になりますか？

榎原：月10万円もあれば、結構いい生活ができます。もちろん家選びに当たりはすれはるので「現地のやり方をわかかって探せば」という条件つきですけど。

榎田：地元のスーパードで食材を買って自炊すれば、毎回の食事にビールをつけても、月10万円ならいい生活ができます。

榎原：僕は月の食費を100ユーロに抑えるために、家で料理を作っています。向こうではミルク

イスという名前の米が500グラム49セントで売っているんですよ。日本の米に味が近くて、普通に炊いても、それなりに食べられるんで、僕は今も食べています。

榎田：肉やソーセージも、日本よりはるかに大きいものが安く買えます。肉が霜降りかどうかは、また別の問題ですけど。

榎原：だからアルバイトでもしていれば、十分に生活ができます。向こうも4部や5部なら、アルバイトくらいのお金が出るので。それプラスちょっとやれば、充分生活できると思います。

全力と駆け引き

——ドイツでは理不尽な指導者はいませんか？

榎原：中にはいますね。

榎田：怒鳴り散らしている人はいますね。なにを言っているかはわかりませんが（笑）。日本だとたまに言っていることが矛盾している指導者がいますけど、ドイツ

ではそういう怒られ方はなかったですね。ただ、軽いプレーに対しては言ってきます。チームで今までやってきたことや、チームメイトを裏切るような態度やプレーをすると、怒られる。ピルナの時の監督がそうでした。

榎原：それはどこでも共通ですよ。ちゃんとした判断に基づいたプレーであれば、ミスになったとしても言われることはありません。

——日本のシユート練習で、指導者が「主力でやれ」と言つと、パワーシユートに辺倒になってしまいます。お2人の考える「主力」の定義は違いますか？

榎原：周りが見えなくなるくらいやるのが全力ではないと、僕は思います。周りから手を抜いているのよに見えても、結果が出ればいいことなんです。その瞬間、その瞬間で、自分の中でベストと思える選択ができていたら、それが全力なのかな。

榎田：ゆめ先生で教える時にも、子どもたちにそういう話をしま



ドイツでは大ケガも経験した榎田だが、37才の今も北陸電力でプレーを続ける

す。全力で速く走ることでも大事だけど、準備する、みんなで協力する、考える、声をかける、意見を言う、意見を聞くといったことも大事だから、ただがむしゃらに走るだけじゃないよね。そついつ話をすると、足の速い子が、自分の足の速さをチームのために活かそつとしてくれたりするんで、そこは日本人のよさかなと思います。

梶原：試合後に立てないくらいに疲れて負けるよりは、試合が終わってもまだ走れるくらいで勝つことの方が大事です。走ることや疲れることが目的ではないので。

——ハンドボールはやり取りの部分もありますからね。

梶原：僕はこの身長（169cm）ですけれど、ハンドボールでは頭を使えばなんとかなることがたくさんあります。そこが「日本人はもっとハンドボールでやれるんじゃないか」と思う部分です。「日本人は足が速いから速攻だ」と言っているんですけど、走る速さだけがハンドボールではありません。最近



相手をズラす一例として、片手キャッチをすれば、大きい相手でもズラすことができると、梶原は考える

はわからないですけど、昔の日本のハンドボールは、走る以外の部分が遅かったと思います。パススピードだったり、ボールのもらい方だったり。もうう時に止まっていたら、そのあとのプレーが遅くなります。

——ドイツはパスが速いですか？

梶原：最初はキャッチボールが怖かったです。シュートみたいなパスがガンガン来ました。練習でも試合でも、それが普通のパス回しで、でも、すぐに慣れましたよ。

梶原：「小さくてもいいから」

て、具体的にはどついつ部分なのかな？

梶原：2mの選手からすると、小さい選手は守りにくいんですよ。普通に守ると、手が僕の顔に当たるので退場になりやすい。だからさらに低い姿勢を取らないと守れない。そうなる2mの選手と言えども上が空いてきます。そこでシュートを打つか、ポストにパスを落とす選択肢が生まれます。相手の重心が下がったところで、2mの味方がクロスすれば、相手を上下に揺さぶることもなります。

——大きいGKに対するシュートはどうですか？

梶原：GKはボールを見てから反応できないんで、ある程度の予測に基づいて動くしかありません。だから僕はその逆を狙います。僕は2軍戦で7mTを打たせてもらうんですけど、結構簡単に入ったりします。僕なんかボールのスピードはないんですよ。でもGKがこつこつに動くような動きをし

て、逆に打ちます。向こうも小さい選手に慣れていませんから、僕が手を下げれば、いつしよになつて手を下げるから、そこから上に投げるだけでゴールになる。7mTの目的はシュートを入れることなんで、それでいいのかなと思つています。

——まさに「駆け引き」ですね。

梶原：一歩引いて考えれば、意外と簡単なことだったりするんですよ。一生懸命動く前に「どつどつしたら、（相手が）どつ動かない」と考えれば、もっと簡単にハンドボールができると思います。僕は小さいころからそついつハンドボールを教わってきたし、自分で考える喜びを奪われなくなつたから、大学ではハンドボール部に入りませんでした。

——たとえ周囲からは一生懸命に見えなくても、自分の持てるものをフルに使って駆け引きするのが「全力」と言えてつですね。お二人とも、貴重なお話をありがとうございました。